

第5章 アンケート調査

5.1 調査概要

5.1.1 目的

本アンケート調査の目的は、母親の授乳の実態とその授乳行動における規定因を決定することである。この調査ではさらに、それら規定因間の相互関係も明らかしようとしている。

5.1.2 調査対象

生後4か月の乳児を抱える彦根市在住の女性を対象に、1999年10月5日、19日、11月9日、16日の計4回にわたりアンケート調査を実施した。彼女たちは実際に子どもに母乳を与えているため、母乳育児および母乳汚染問題について最も関心が高いと考え、調査対象として選んだ。また生後4か月といえば、授乳方法が母乳・人工乳にはっきりと別れ、一般的にまだ離乳食に移行していない時期であるため、4か月児を持つ母親がアンケートの対象に最も適していると考えた。

5.1.3 調査方法

調査場所としては、彦根市にある福祉保健センターを選んだ。同センターでは毎月2回、彦根市内の4か月児を対象にした健康調査(4か月児検診)を行っている。そこで同センターを訪れた保護者全員を対象に、同センターの許可のもとでアンケート調査を行った(集合調査法)。アンケート用紙(APPENDIX「アンケート用紙」参照)は同センター入り口で、健康調査に訪れた保護者全員に配布し、待ち時間に記入してもらい、記入後直ちに回収を行った。

5.2 調査項目および調査結果

解答者数は4回の調査で163人。そのうち有効回答数は143人で、回収率は88%であった。

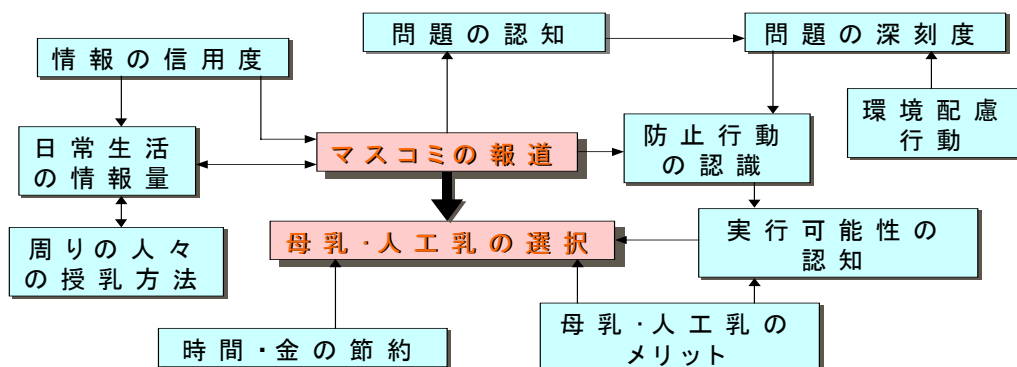


図 5-1 授乳方法規定因のモデル図

アンケート調査票の制作段階では、授乳方法に対する規定因とそれら規定因の相互関係を表す図 5-1 のようなモデルを構築した。調査結果は、同モデルに基づいて考察を行った。ただし、調査内容の一部については、調査の協力機関である同センターの意向を受けて修正を施した。その修正の概要は以下の通りである。

授乳や環境問題についてのアンケートとし、環境ホルモンによる母乳汚染問題についての質問は、露骨な表現を避ける。なぜなら、母乳汚染問題は未だ影響の有無がはっきりしないために、質問の内容によって母親が不安を感じるかもしれないからである。

授乳方法についての質問で、病院での授乳指導に関する質問を加えた。

母乳・人工乳のメリットについては、同センターの指導を受け、正しい表現に修正したり、項目を増やしたりした。

問 13 (後述) の属性質問において、過去の検診実施の経験から、(1)年齢と(2)最終学歴を適切な項目区分に修正した。

調査票の表紙に、調査の目的が授乳や環境問題に対する母親の意識の検討であること、滋賀県立大学卒業研究の調査として実施するものであることを明記した (APPENDIX「アンケート用紙」参照)。

以下がアンケート項目とその単純集計の結果である。

問 1 授乳方法

自分の子どもが2か月児～4か月児の時にに行った授乳方法を、単数回答の形式で尋ねた。

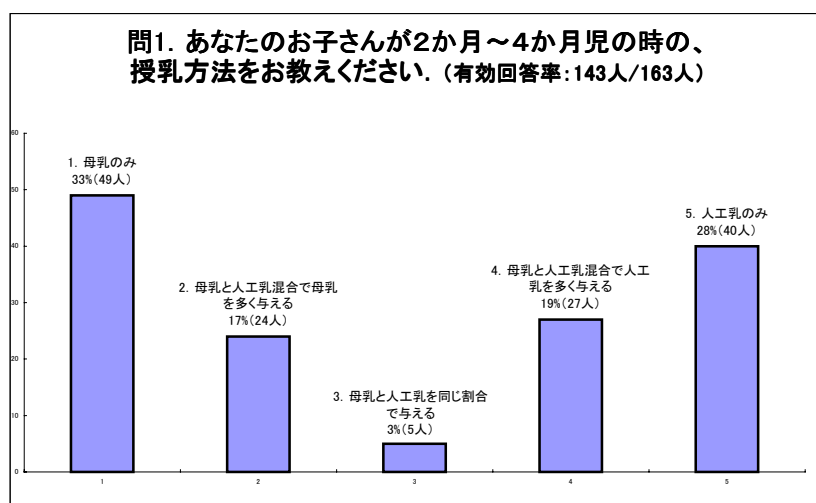


図 5-2 問 1.あなたのお子さんが2か月～4か月児の時の、授乳方法をお教えてください

結果は、選択肢「1.母乳のみを与える」が最も多く、全体の 33%、次いで「5.人工乳のみ」が 28%、「4.母乳・人工乳混合で人工乳を多く与える」が 19%、「2.母乳・人工乳混合で母乳を多く与える」が 17%、「3.母乳と人工乳を同じ割合で与える」が 3%であった。図 5-2 より、この母集団は選択肢 1、2 の「母乳グループ」と選択肢 4、5 の「人工乳グループ」にほぼ二分されることがわかった。

問2 周囲の人々の授乳イメージ

家族や知人など、身近にいる人々の授乳方法について、自分がどのように想像しているのかを単数回答の形式で尋ねた。

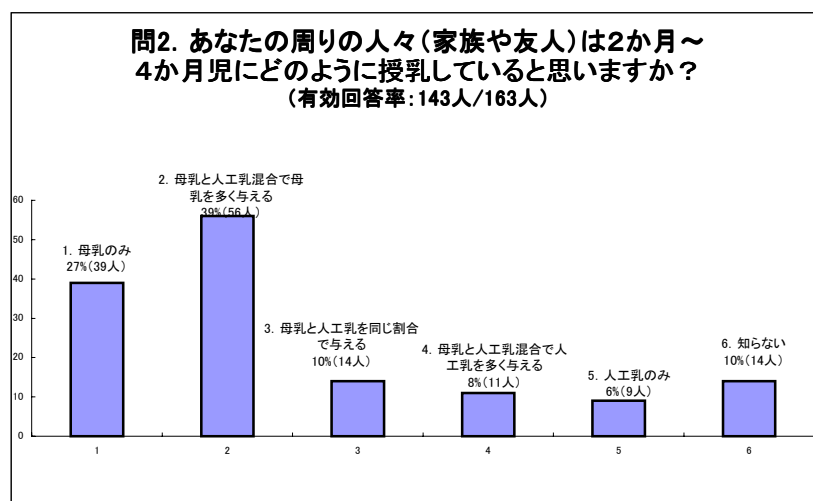


図 5-3 問2.あなたの周りの人々(家族や友人)は2か月～4か月児にどのように授乳していると思いますか？

割合が高かったのは、選択肢「2.母乳と人工乳混合で母乳を与えている」の 39%と「1.母乳のみ」の 27%であった。その他の項目はすべて 10%以下であった。問1の自分の授乳方法に関わらず、周囲の人々の授乳方法に対するイメージは「母乳を与えている」が多いことが明らかになった。

問3 病院の授乳指導

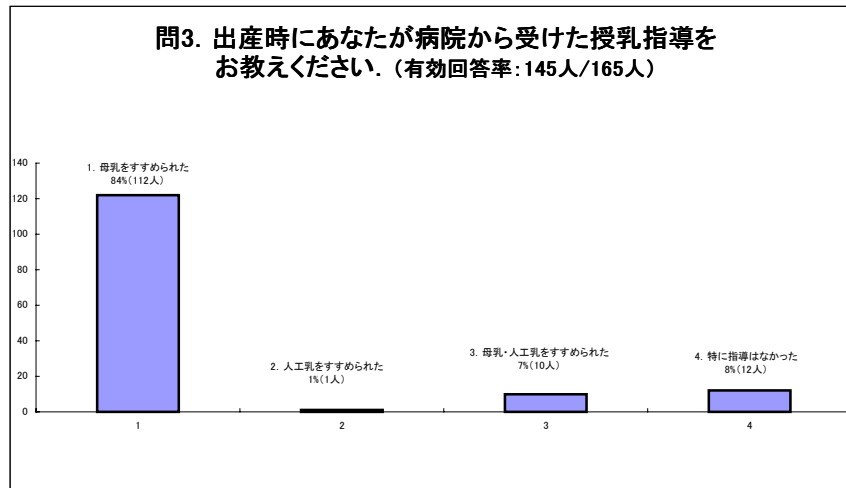


図 5-4 問3. 出産時にあなたが病院から受けた授乳指導をお教えてください

出産時に、実際に自分が受けた授乳指導を尋ねたところ、ほとんどの母親が選択肢「1. 母乳をすすめられていた」(84%)を選んだ。

問4 母乳のメリット

自分が考える母乳のメリットについて、「栄養バランスが良い」、「授乳時間が短い」など9項目から、重要であると考えたもの3つを尋ねた(複数回答)。

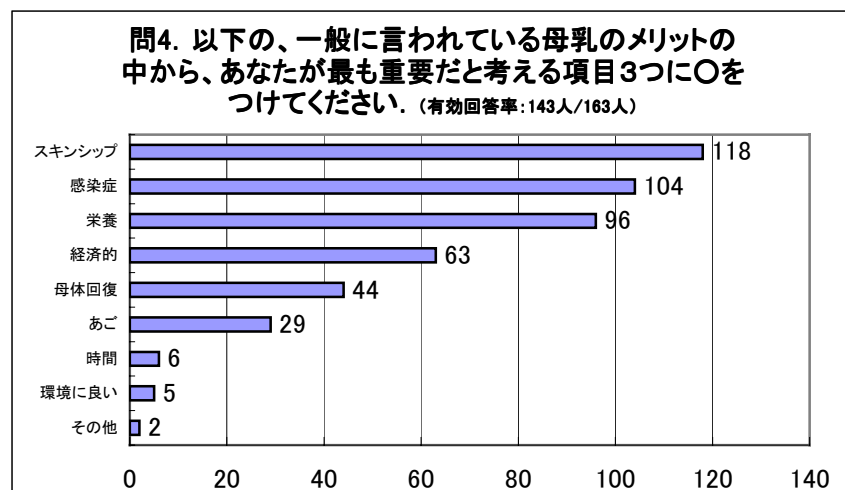


図 5-5 問4. 以下の、一般に言われている母乳のメリットの中から、あなたが最も重要だと考える項目3つに をつけてください

上位3つは「スキンシップがはかれる」(118人)、「こどもが感染症にかかりにくくなる」(104人)、「栄養バランスが良い」(96人)であった。これに「経済的である」(63人)、「母体の回復を早める」(44人)、「子どものあごの発達が良くなる(29人)」が続く。「授乳時間が短い」(6人)、「環境に良い(ごみが出ない)」(6人)を挙げる人は少なく、「その他」は2人であった。

問5 人工乳のメリット

問4と同様に、人工乳のメリットについて、「飲ませた乳の量がわかる」、「常に同じ質の乳が飲ませられる」など6項目から、重要であると考えられるもの3つを尋ねた(複数回答)。

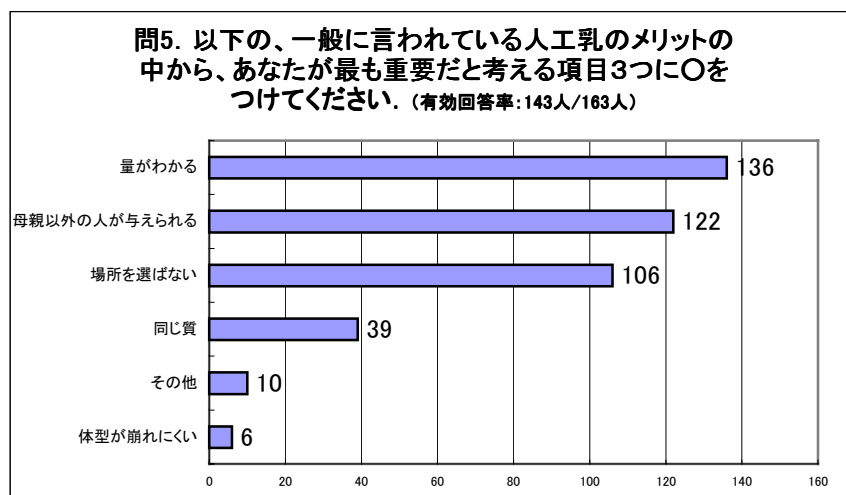


図 5-6 問5. 以下の、一般に言われている人工乳のメリットの中から、あなたが最も重要だと考える項目3つに ○ をつけてください

上位3つは「飲ませた乳の量がわかる」(136人)、「母親以外の人を与えられる」(122人)、「場所を選ばない(人目を気にせずに乳を与えられる)」(106人)。それらに続く項目は「常に同じ質の乳を与えられる」(39人)、「体型が崩れにくい」(6人)、「その他」(10人)であった。

問6 防止行動の認識

この質問では、出産・育児のために妊娠前よりも気を付けている、または気を付けていた行動を「牛乳を飲むように心がけた」、「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」などの8項目から複数選択の形式で尋ねた。

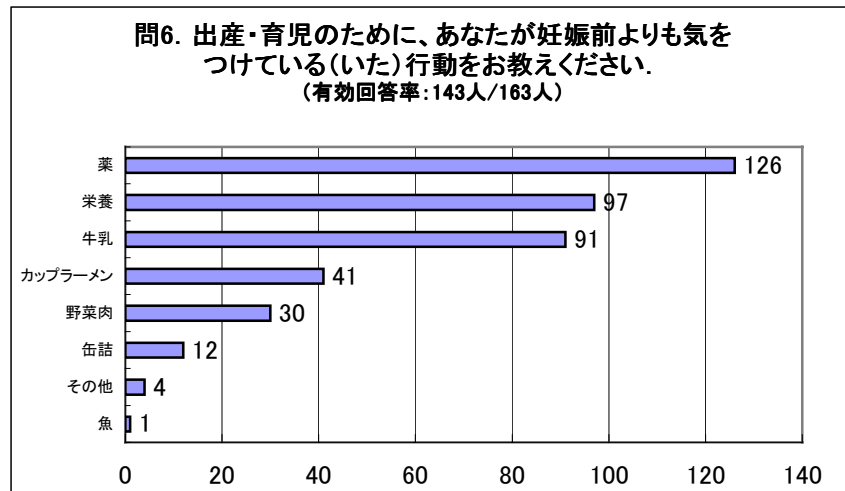


図 5-7 問6. 出産・育児のために、あなたが妊娠前よりも気をつけている(いた)行動をお教えてください

特に多かったのは、「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」(126人)、「牛乳を飲むように心がけた」(101人)、「栄養バランスの良い食事を取る」(98人)。その他の項目はすべて、のべ50人以下であった。

問7 情報の信頼度

出産・育児に関する情報源の信頼度を「家族」、「テレビ・ラジオ」など10項目の中から、信頼できる順に1位から5位まで尋ねた。

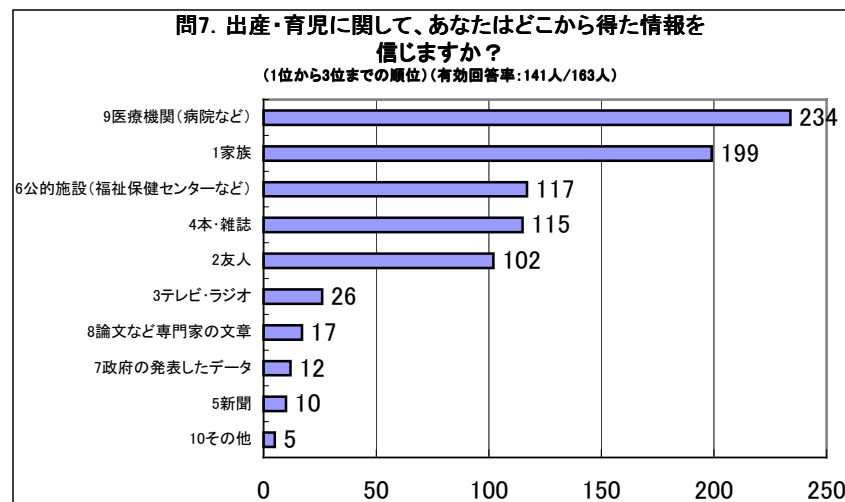


図 5-8 問7. 出産・育児に関して、あなたはどこから得た情報を信じますか？

集計においては、1位に3点、2位に2点、3位に1点を、それ以下は0点と点数化して

得点合計を求めた。得点を3位までとしたのは、順位を3位までしか記入していない人が多かったためと、データの処理のしやすさを考慮したためである。

集計の結果、点数が特に高かったのは、「医療機関(病院など)」(234点)と「家族」(199点)。次いで「公的施設(福祉保健センターなど)」(117点)と「本・雑誌」(115点)、「友人(102点)」の3つが並んだ。その他の項目はすべて30点以下であった。

問8 母乳汚染問題の認知度

母乳汚染問題の認知度を「内容を知っている」「内容を少し知っている」などの4段階に分け、単数回答の形式で尋ねた。

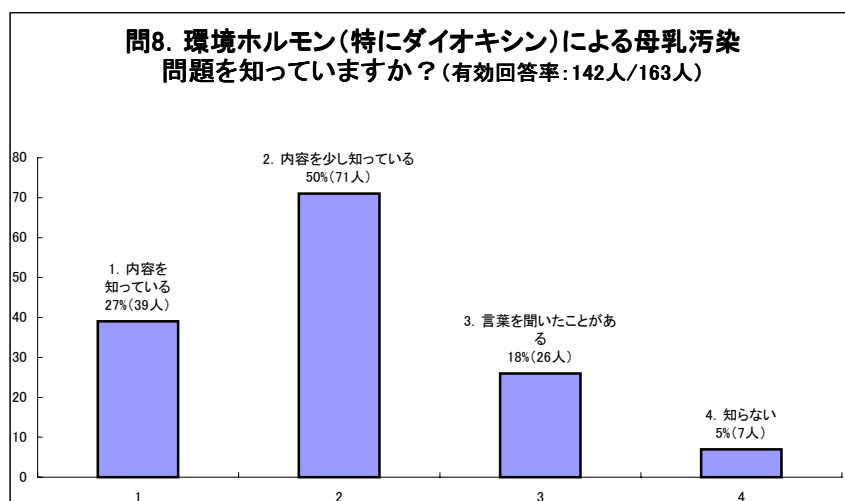


図 5-9 問8.環境ホルモン(特にダイオキシン)による母乳汚染問題を知っていますか？

最も多かったのは選択肢「2.内容を少し知っている」(50%)であった。次いで「1.内容を少し知っている」(27%)、「3.言葉を聞いたことがある」(18%)、「4.知らない」(5%)となっている。

問9 母乳汚染問題の深刻度

母乳汚染の認知度を「深刻である」、「どちらかと言えば深刻である」などの4段階に分け、単数回答の形式で尋ねた。

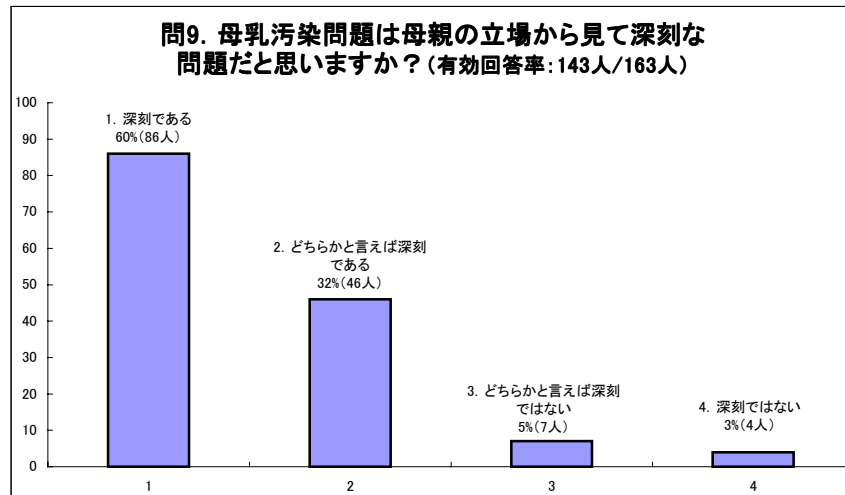


図 5-10 問9. 母乳汚染問題は母親の立場から見て深刻な問題だと思いますか？

その結果、最も多かったのは選択肢「1. 深刻である」(60%)、次いで「2. どちらかと言えば深刻である」(32%)であった。「3. どちらかと言えば深刻ではない」(5%)と「4. 深刻ではない」(3%)を選んだ人は少なかった。

問8と問9の結果から、全体の77%の人が環境ホルモン問題の内容を知っており、さらに92%の人が母乳汚染問題を深刻な問題であると捉えていることがわかった。よって、母乳汚染問題に対する母親(アンケート対象者)の関心の高さが明らかになった。

問10 責任帰属認知

今後、「環境」問題が深刻になった場合の責任帰属の先を「自分」、「企業」などの7項目から単数回答の形式で尋ねた（母乳汚染ではなく、ここでは環境問題全般に関する質問をしている）。

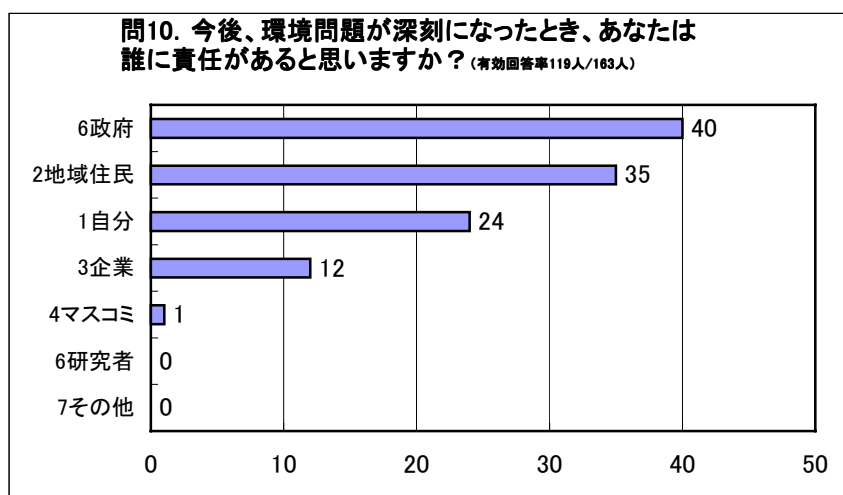


図 5-11 問10. 今後、環境問題が深刻になったとき、あなたは誰に責任があると思いますか？

選択の割合が高かったのは選択肢「6. 政府」(34%)、「2. 地域住民」(29%)、「1. 自分」(20%)、「3. 企業」(10%)、「4. マスコミ」は1%、「5. 研究者」と「7. その他」は0%と少なかった。

この結果より、自分または地域住民、つまり自分たちに責任があると考える人と、政府または企業、つまり自分たちの生活とは少しかけ離れたところにあると考えている人に別れることが明らかになった。

問11 日常生活の情報量

出産・育児も含めた日常生活の情報源を「家族」、「友人」など8項目の中から、情報源として活用している順に1位から5位まで挙げてもらった。

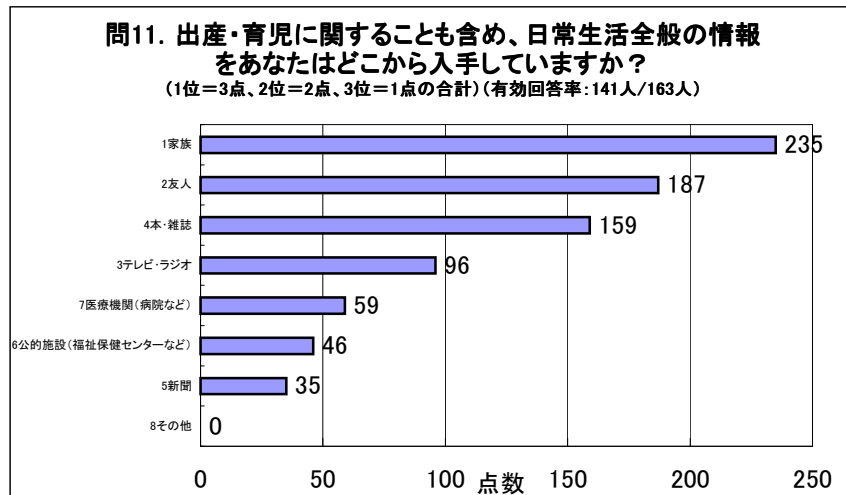


図 5-12 問 11. 出産・育児に関することも含め、日常生活全般の情報をあなたはどこから入手していますか？

問7と同様に、1位に3点、2位に2点、3位に1点、それ以下は0点と点数化して集計を行った。その結果、150点以上と点数が高かったのが、選択肢「1.家族」(235点)と「2.友人」(187点)、「4.本・雑誌」の3つ。それ以下は「3.テレビ・ラジオ」が96点、「7.医療機関」が59点、「6.公的施設」が46点、「5.新聞」が35点、その他が0点と、すべて100点以下の点数であった。

問12 環境配慮行動

日ごろから実践している環境配慮行動を「ごみの量を少なくする」、「粉石けんを使う」などの10項目から複数回答の形式で尋ねた。

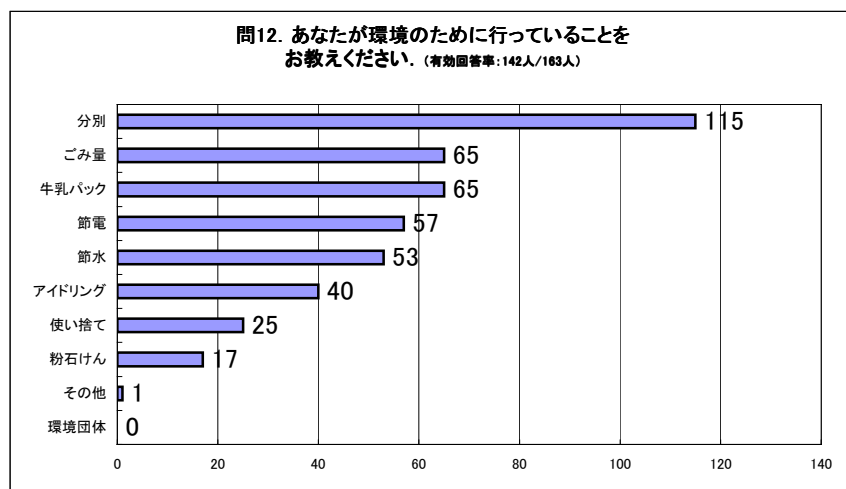


図 5-13 問 12. あなたが環境のために行っていることをお教えてください

その結果、最も多かったのは「ごみをきちんと分別する」の115人。次に「ごみの量を少なくする」と「牛乳パックやアルミ缶、生鮮食品のトレイなどをリサイクルに出す」が並んで65人。以下、「節電を心がける」(57人)、「節水を心がける」(53人)「アイドリングストップを心がける」(40人)、「使い捨て製品を買わないようにする」(25人)、「粉石けんを使う」(17人)、「その他」(1人)、「環境団体に所属して活動する」(0人)と続いた。

問 13 個人属性

回答者の年齢、最終学歴、現在の職業を尋ねた。

(1) 年齢

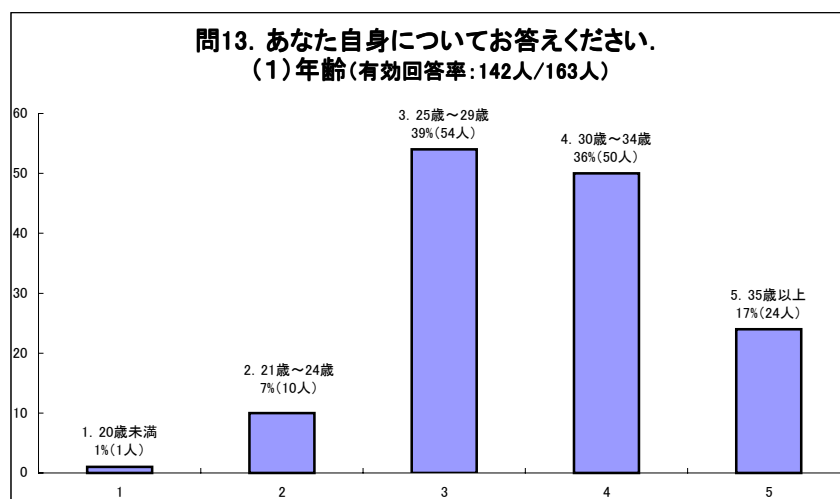


図 5-14 問13. あなた自身についてお答えください(1) 年齢

年齢は、選択肢「3.25~29歳」(39%)と「4.30~34歳」(36%)が最も多く、次いで「5.35歳以上」(17%)、「2.21~24歳」(7%)、「1.20歳未満」(1%)となった。

(2) 最終学歴

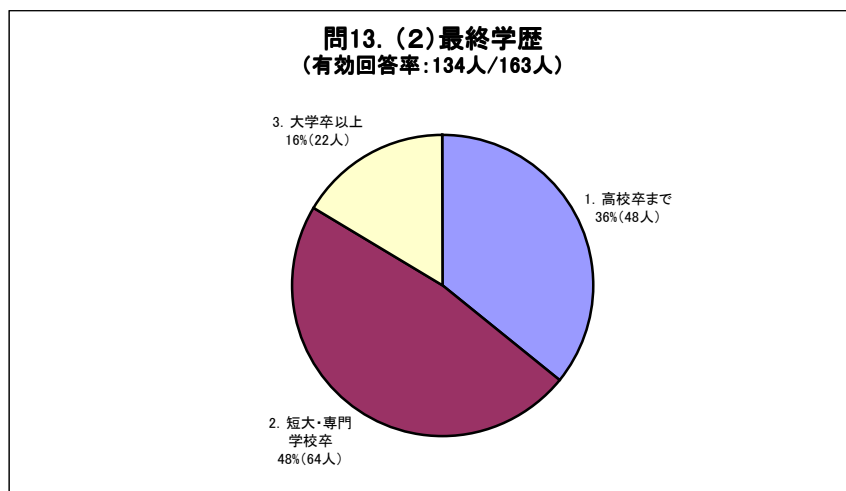


図 5-15 問 13.あなた自身についてお答えください(2) 最終学歴

最終学歴は、多い順に2「短大・専門学校卒」(48%)、1「高校卒まで」(36%)、3「大学卒以上」(16%)であった。

(3) 現在の職業

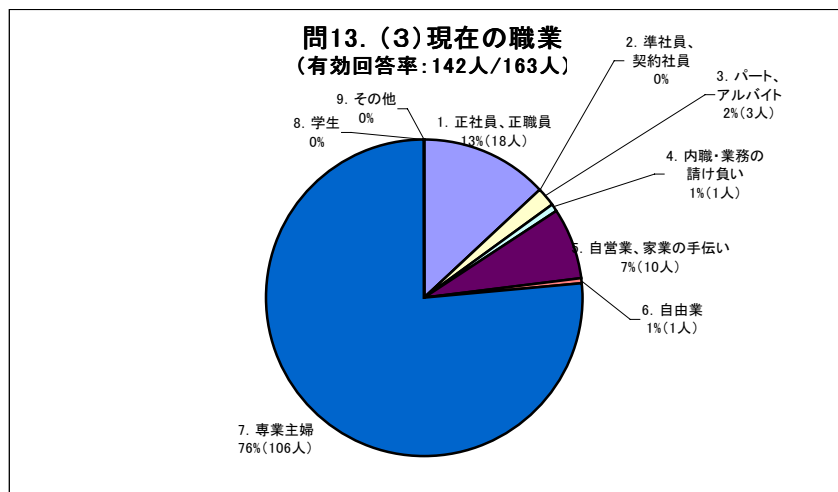


図 5-16 問 13.あなた自身についてお答えください(3) 現在の職業

現在の職業は、ほとんどが「7.専業主婦」(76%)で、以下、割合の高い順に「1.正社員、正職員」(13%)、「5.自営業、家業の手伝い」(7%)、「3.パート、アルバイト」(2%)、「4.内職・業務の請け負い」(1%)、「6.自由業」(1%)。その他の選択肢は0%であった。

5.3 アンケート結果の分析

5.3.1 分析方法

質問項目の分類は表 5-1、適用した分析方法については表 5-2 の通りである。

全ての数量データにおいて、質問間の関係を明らかにするため、等高線のグラフを用いクロス集計を行った。

表 5-1 質問項目の分類

| 質問項目 | データの分類 | 選択肢 |
|-------------------|------------|---|
| 問 1「授乳方法」 | 数量・カテゴリデータ | 1～5：母乳～人工乳 |
| 問 2「周囲の人々の授乳イメージ」 | 数量・カテゴリデータ | 1～5：母乳～人工乳、6：知らない |
| 問 3「病院の授乳指導」 | 数量データ | 1～3：母乳～人工乳、4：指導無し |
| 問 4「母乳のメリット」 | カテゴリデータ | 重視しているメリット 3 つをつける |
| 問 5「人工乳のメリット」 | カテゴリデータ | 重視しているメリット 3 つをつける |
| 問 6「防止行動の認識」 | カテゴリデータ | 8 選択肢を複数回答 |
| 問 7「情報の信頼度」 | 数量・カテゴリデータ | 10 選択肢を 1～5 位まで順位付け（1 位=3 点、2 位=2 点、3 位=1 点それ以下は 0 点として点数を集計） |
| 問 8「母乳汚染問題の認知度」 | 数量データ | 1～4：内容を知っている～知らない |
| 問 9「母乳汚染問題の深刻度」 | 数量データ | 1～4：深刻である～深刻ではない |
| 問 10「責任帰属認知」 | カテゴリデータ | 7 選択肢を単数回答 |
| 問 11「日常生活の情報量」 | 数量・カテゴリデータ | 8 選択肢を 1～6 位まで順位付け（1 位=3 点、2 位=2 点、3 位=1 点それ以下は 0 点として点数を集計） |
| 問 12「環境配慮行動」 | カテゴリデータ | 10 選択肢を複数回答 |
| 問 13(1)「年齢」 | 数量データ | 1～5：20 歳未満～35 歳以上 |
| 問 13(2)「最終学歴」 | 数量データ | 1～3：高校卒まで～大学卒以上 |
| 問 13(3)「現在の職業」 | カテゴリデータ | 9 選択肢を単数回答 |

表 5-2 適用した分析方法と分析の目的および質問項目

| 分析方法 | 分析目的 | 数量データ | カテゴリデータ |
|----------|-------------------------|----------------------------------|-----------------------------|
| 独立係数 | 授乳方法は周囲の人、職業の有無に影響を受けるか | | 問 1, 問 2, 問 13(3) |
| 相関・偏相関係数 | 各質問、選択肢間に関連があるか | 問 1～3, 問 7～9, 問 11, 問 13(1), (2) | |
| 相関比 | 各質問の間に関連があるか | 問 1, 問 13(1) | 問 2, 問 3, 問 8, 問 9, 問 13(3) |
| 重回帰分析 | 各質問の間に因果関係があるか | 問 1～3, 問 7～9, 問 11, 問 13(1), (2) | |
| 数量化類 | 質問の選択肢間にある傾向を明らかにする | | 問 4～6, 問 12 |
| 因子分析 | 質問の選択肢間に共通因子があるか | | 問 7, 問 11 |

分析方法に合わせ数量データをカテゴリデータにしたもの...問 1、問 2

分析に合わせカテゴリデータを数量データにしたもの...問 7、問 11

問 1 と問 2、問 13(3)に関しては、後述方法によって回答をそれぞれ二つずつのグループに分け、クロス集計から独立係数をもとめそれぞれの関連性を調べた。

数量データ(問 1～3、問 7～9、問 11、問 13(1)、(2))について、選択肢間に関連があるかないかを調べるために、相関係数と偏相関係数を求めた。同時に無相関検定も行った。さらに、授乳方法と他の数量データとの間に因果関係があるかどうかを調べるために、問 1 を目的変数、それ以外の数量データを説明変数として、重回帰分析を行った。

問 7 と問 11 は回答に順位を求めているため、各選択肢において、1 位の場合は 3 点、2 位は 2 点、3 位は 1 点、それ以下の場合は 0 点と点数を付けた。

数量データである問 1、問 13(1)とカテゴリーデータである問 2、問 3、問 8、問 9、問 13(3)に関連があるか調べるために、相関比を求めた。

問 4、問 5、問 6、問 10、問 12、問 13(3)はそれぞれの選択肢の類似度、傾向を調べるために、数量化類を適用して分析を行った。

問 7 と問 11 において、各選択肢に共通の因子を探るため、因子分析を行った。

5.3.2 分析結果

< 質問間の関係 >

クロス集計

等高線グラフによるクロス集計の結果より問 1 の授乳方法は、母乳のみまたは母乳・人工乳混合で母乳を多く与えている母乳グループと、人工乳のみまたは母乳・人工乳混合で人工乳を多く与えている人工乳グループの 2 つに別れることがわかった。しかしその 2 グループにおいて、他の質問回答にはっきりとした差異は見られなかった。また、その他の質問間のクロス集計においても、グラフからはっきりとわかるような相関関係は見られな

かった。

問1と問2

表 5-3 問1と問2のクロス表

| | | 問2. | | |
|----|-----|-----|----|-----|
| | | 全体 | 母乳 | 人工乳 |
| 問1 | 全体 | 111 | 92 | 19 |
| | 母乳 | 59 | 55 | 4 |
| | 人工乳 | 52 | 37 | 15 |

問1を選択肢1または2を選んだ「母乳グループ」と選択肢4または5を選んだ「人工乳グループ」の2グループに分け、また問2においても、同様に「母乳グループ」と「人工乳グループ」の2グループに分けて、クロス集計を行った。結果は表5-3の通りである。カイ自乗は9.486、独立係数は0.259377となり、弱いながらも問1と問2の間には関連があることが判明し、母親の授乳方法は周囲の人々の授乳イメージに影響されていることがわかった。

問1と問13(3)

表 5-4 問1と問13(3)のクロス表

| | | 問1. | | |
|----------|-----|-----|----|-----|
| | | 全体 | 母乳 | 人工乳 |
| 問13. (3) | 全体 | 134 | 68 | 66 |
| | 有職者 | 32 | 16 | 16 |
| | 無職者 | 102 | 52 | 50 |

問1を選択肢1または2を選んだ「母乳グループ」と選択肢4または5を選んだ「人工乳グループ」の2グループに分け、また問13(3)においても、選択肢1～6までを選んだ「有職者」と選択肢7、8を選んだ「無職者」に分けて、クロス集計を行った。結果は表5-4の通りである。カイ自乗は0.009367、独立係数は0.008361となり、問1と問13(3)の間には関連が無いことが判明した。よって、職業の有無は授乳方法の選択には関係が無いことがわかった。

相関

問1、問2、問3、問7、問8、問9、問11、問13(1)、問13(2)間の単相関係数はAPPENDIX表1の通りである。相関係数が0.4以上のものを斜体で示している。同時に無相関検定も行っている。

偏相関係数を求めた結果はAPPENDIX表2の通りである。相関係数が0.4以上のものを斜

体で示している。同時に無相関検定も行っている。*がついているものが危険率 5%で関連があるもの、**がついているものが危険率 1%で関連があるものである。

表 5-5 質問間の関連

| | 問 2 | 問 7 | 問 8 | 問 9 | 問 11 | 問 13(2) |
|---------|------------------|---------------------------------------|-----|---------------------------------------|----------------------|---------|
| 問 2 | | | | | (問 11.2 「友人」) | |
| 問 7 | | (選択肢の 間) | | (問 7.4 「本・雑誌」、 問 7.9「医療 機関」) | (同じ名前 の選択肢の 間) | |
| 問 8 | | | | | | |
| 問 9 | | (問 7.4 「本・雑誌」、 問 7.9「医療 機関」) | | | | |
| 問 11 | (問 11.2 「友人」) | (同じ名前 の選択肢の 間) | | | | |
| 問 13(2) | | | | | | |

偏相関とその無相関係数を求めた結果は、表 5-5 の通りである。問 7「情報の信頼度」の選択肢の間に、問 7「情報の信頼度」と問 11「日常生活の情報量」の同じ選択肢の間に、また問 2「周囲の人々の授乳イメージ」と問 11「日常生活の情報量」の選択肢「2.友人」、そして問 11「2.友人」と問 7「2.友人」の間に相関があることがわかった。さらに、問 8「母乳汚染問題の認知度」と問 9「母乳汚染問題の深刻度」の間にも相関があり、問 8「母乳汚染問題の認知度」は問 13(2)「最終学歴」と、また問 9「母乳汚染問題の深刻度」は問 7「情報の信頼度」の選択肢「4.本・雑誌」および「9.医療機関」と相関があることがわかった。

相関係数を求めた結果、問 7「情報の信頼度」と問 11「日常生活の情報量」の三つの選択肢「1.家族」、「2.友人」、「6.公的施設」の間に 0.4 以上の相関があったことから、これら三つの項目においては母親の情報源と情報の信頼度の間に関係があると考えられる。つまり、「家族」、「友人」、「公的施設」の 3 つを選んだ母親は信頼のおける情報源から情報を入力していると言える。

一方、この三つ以外で、問 11 の単純集計において点数の高かった「本・雑誌」は、問 7 では点数が低く、偏相関係数も 0.1642 と低い。このことから、母親は「本・雑誌」を情報源としているが、その情報を信頼しているわけではないと考えられる。

また、無相関検定の結果より、学歴の高い人ほど母乳汚染問題の認知度が高いと判断できる。そして、母乳汚染問題の認知度が高い人ほど、同問題を深刻に捉えており、それらの人々は、情報源として「本・雑誌」、「医療機関」に信頼を寄せていることが読み取れる。

相関比

表 5-6 相関比

| | 偏差平方和S | 全体平均 | 選択肢平均 | 選択肢平均 | 選択肢平均 | 選択肢平均 | 選択肢平均 | 選択肢平均 | 選択肢平均 | Sb | 相関比(=Sb/S) |
|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------------|
| 問1と問2 | 405.4483 | 2.896552 | 2.74359 | 2.892857 | 2.642857 | 2.909091 | 3.222222 | 3.142857 | | 3.619925 | 0.008928 |
| 問1と問3 | 405.4483 | 2.896552 | 2.819672 | 5 | 3.4 | 3.083333 | | | | 8.098822 | 0.019975 |
| 問1と問8 | 405.4483 | 2.896552 | 2.74359 | 2.859155 | 3.192308 | 2.571429 | | | | 4.025991 | 0.00993 |
| 問1と問9 | 405.4483 | 2.896552 | 2.883721 | 2.913043 | 2.428571 | 3 | | | | 1.602516 | 0.003952 |
| 問1と問13(3) | 385.5396 | 2.942446 | 3.166667 | 0 | 2.666667 | 2 | 2.8 | 4 | 2.924528 | 3.376675 | 0.008758 |
| 問3(1)と問2 | 104.7153 | 3.605839 | 3.789474 | 3.581818 | 3.571429 | 3.727273 | 3.428571 | 3.357143 | | 2.62846 | 0.024613 |
| 問3(1)と問3 | 104.7153 | 3.605839 | 3.655462 | 5 | 3.444444 | 3.3 | | | | 3.612262 | 0.034496 |
| 問3(1)と問8 | 104.7153 | 3.605839 | 3.789474 | 3.6 | 3.5 | 3.285714 | | | | 2.303703 | 0.022 |
| 問3(1)と問9 | 104.7153 | 3.605839 | 3.654762 | 3.636364 | 3.142857 | 3.5 | | | | 1.78732 | 0.017068 |

問1「授乳方法」と問13「個人属性」の(1)年齢、(2)最終学歴の選択肢による数量データと、カテゴリータである問2「周囲の人々の授乳イメージ」、問3「病院の授乳指導」、問8「母乳汚染問題の認知度」、問9「母乳汚染問題の深刻度」、問13(3)「現在の職業」の間に関連があるか調べるために、相関比を求めた。

相関比を求めるにおいて、関連の有無は相関比が0.25を基準とした。相関比を求めた結果は表5-6の通りである。

問1「授乳方法」

求めた相関比は次の二つである。

- (1) 問1「授乳方法」と問2「周囲の人々の授乳イメージ」の各5選択肢をそのままにして求めたもの。
- (2) 問1で選択肢「1.母乳のみ」または「2.母乳・人工乳混合で母乳を多く与える」を選んだ人を「母乳グループ」、選択肢「4.母乳・人工乳混合で人工乳を多く与える」または「5.人工乳のみ」を選んだ人を「人工乳グループ」とし、そのグループを2選択肢とみなして求めたもの。

問2「周囲の人々の授乳イメージ」との相関比は(1)0.008928 および(2)0.089944、問3「病院の授乳指導」との相関比は0.019975、問8「母乳汚染問題の認知度」との相関比は0.00993、問9「母乳汚染問題の深刻度」との相関比は0.003952、問13(3)「現在の職業」との相関比は0.008758となり、すべて関連はなかった。

問13(1)「年齢」

問2「周囲の人々の授乳イメージ」との相関比は0.024613、問3「病院の授乳指導」との相関比は0.034496、問8「母乳汚染問題の認知度」との相関比は0.022、問9「母乳汚染問題の深刻度」との相関比は0.017068となり、すべて関連はなかった。

問 13 (2)「最終学歴」

問 2「周囲の人々の授乳イメージ」との相関比は 0.060862、問 3「病院の授乳指導」との相関比は 0.043688、問 8「母乳汚染問題の認知度」との相関比は 0.05737、問 9「母乳汚染問題の深刻度」との相関比は 0.005183 となり、すべて相関はなかった。

この結果から、授乳方法、年齢、最終学歴の違う人々の間で、周囲の人の授乳方法、病院の授乳指導、母乳汚染問題の認知度、母乳汚染問題の深刻度、職業に差異は無いことがわかった。

重回帰分析

問 1 を目的変数、それ以外の数量データを説明変数として、重回帰分析を行った。その結果は APPENDIX 表 3 の通りである。

求められた重回帰式は、 $y = 0.2024x + 3.21$ である。

判定の結果、説明変数として危険率 5%で問 2 のみが採択された。よって、問 1 と問 2 に因果関係があるという結果が出たが、重相関係数の数値が低いので、求められた重回帰式自身は明確な因果関係を表すものではない結果と終わった。

< 選択肢の傾向、関連 >

問 4「母乳のメリット」、問 5「人工乳のメリット」、問 6「防止行動の認識」、問 10「責任帰属認知」、問 12「環境配慮行動」、問 13(3)「現在の職業」の各選択肢間に傾向や関連があるかを明らかにするために数量化 Ⅱ類を適用した分析を行った。

問 4「母乳のメリット」

表 5-7 問 4 に数量化 Ⅱ類を適用した結果

| | 固有値 | 寄与率 | 累積寄与率 | 相関係数 |
|-------|--------|--------|--------|--------|
| 第 1 軸 | 0.3218 | 23.08% | 23.08% | 0.5673 |
| 第 2 軸 | 0.2609 | 18.71% | 41.79% | 0.5107 |

選択肢「その他」は、 の数が回答数の 10%に満たないので、分析対象から除外した。

問 4 に数量化 Ⅱ類を適用した結果は表 5-7 の通りである。相関係数は第 1 軸、第 2 軸ともに 0.5 以上なので、この二つの軸を採択する。

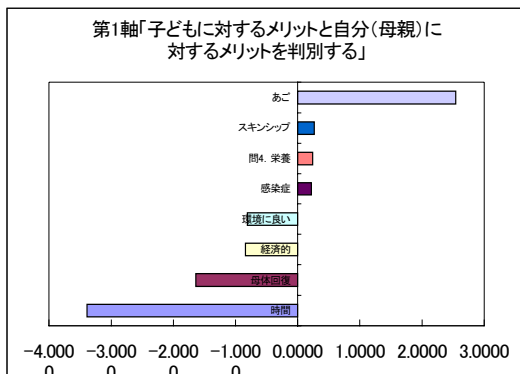


図 5-17 問 4. 第 1 軸

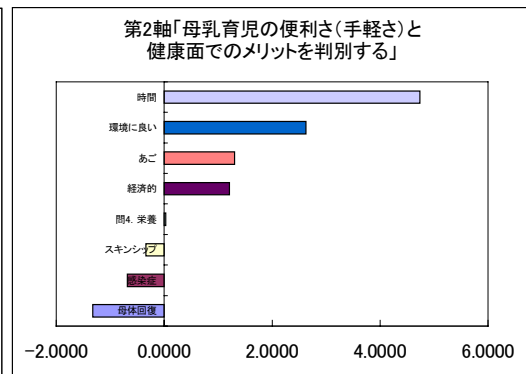


図 5-18 問 4. 第 2 軸

「子どもに対するメリットと自分（母親）に対するメリットを判別する」

「母乳育児の便利さ（手軽さ）と健康面でのメリットを判別する」

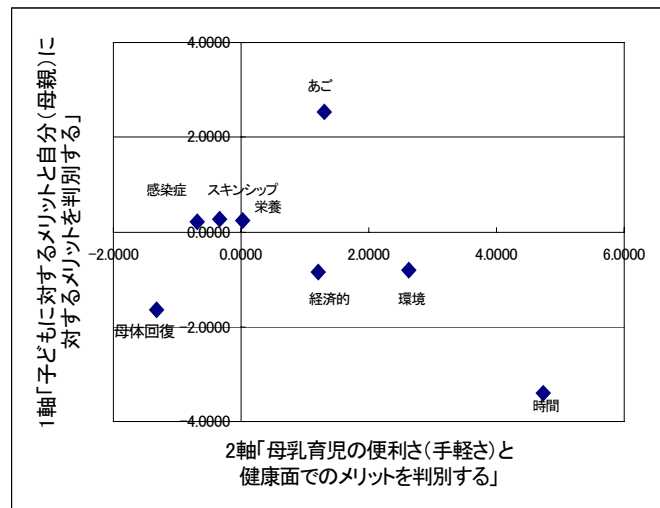


図 5-19 問 4. カテゴリデータ

図 5-17、図 5-18 は 1 軸、2 軸のカテゴリスコアをそれぞれ棒グラフで表したものである。図 5-19 は 2 軸を横軸に、1 軸を縦軸にとり、各選択肢のカテゴリスコアを点グラフで表したものである。

点グラフにおいて各項目をみると、1 軸は「こどものあごの発達が良くなる」、「スキンシップがはかれる」、「栄養バランスが良い」、「子どもが感染症にかかりにくい」の 4 項目と「環境に良い」、「経済的である」、「母体の回復を早める」、「授乳時間が短い」の 4 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、縦軸（1 軸）は、子どもに対するメリットと自分（母親）に対するメリットを判別する軸であることがわかった。

2 軸は「授乳時間が短い」、「環境に良い」、「こどものあごの発達が良くなる」、「経済的である」、「栄養バランスが良い」の 5 項目と「スキンシップがはかれる」、「子どもが感染症にかかりにくい」、「母体の回復を早める」の 3 項目を分けている。カテゴリ位置関係が

ら、横軸（2 軸）は、母乳育児の便利さ（手軽さ）と健康面でのメリットを判別する軸であることがわかった。

また、項目間では「栄養バランスが良い」、「スキンシップがはかれる」、「子どもが感染症にかかりにくい」の3項目が最も類似していることがわかった。このことより、母親は母乳のメリットとして、自分よりも子どもに対するメリットと、子どもの健康面でのメリットを重視して考える傾向があることがわかった。

問5「人工乳のメリット」

表 5-8 問5に数量化 類を適用した結果

| | 固有値 | 寄与率 | 累積寄与率 | 相関係数 |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 第1軸 | 0.3136 | 44.93% | 44.93% | 0.5600 |
| 第2軸 | 0.2850 | 40.84% | 85.77% | 0.5339 |

選択肢「その他」は、 の数が回答数の10%に満たないので、分析対象から除外した。

問5に数量化 類を適用した結果は表5-8の通りである。相関係数は第1軸、第2軸ともに0.5以上なので、この二つの軸を採択する。

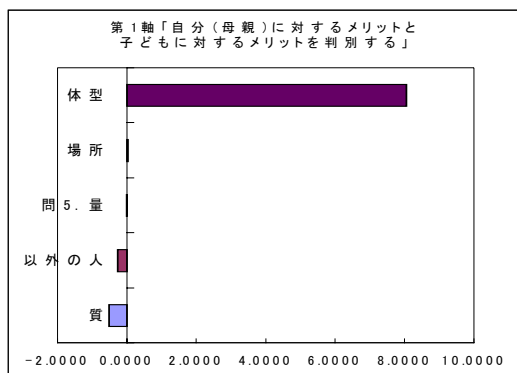


図 5-20 問5. 第1軸

「自分（母親）に対するメリットと子どもに対するメリットを判別する」

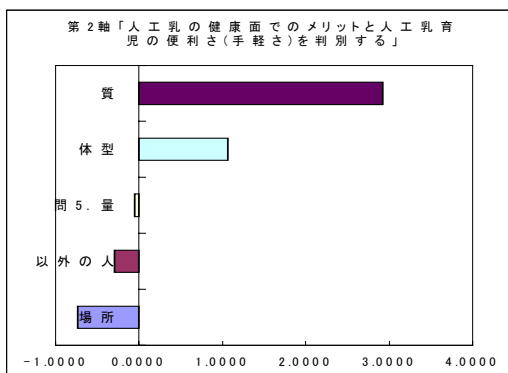


図 5-21 問5. 第2軸

「人工乳の健康面でのメリットと人工乳育児の便利さ（手軽さ）を判別する」

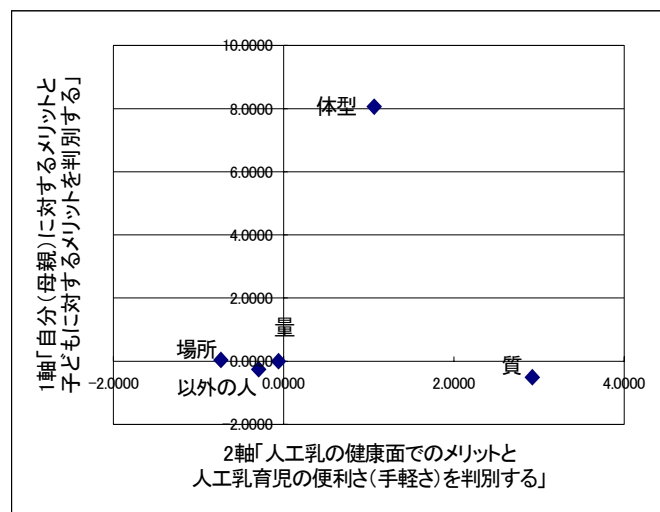


図 5-22 問 5 . カテゴリデータ

図 5-20、図 5-21 は 1 軸、2 軸のカテゴリスコアをそれぞれ棒グラフで表したものである。図 5-22 は 2 軸を横軸に、1 軸を縦軸にとり、各選択肢のカテゴリスコアを点グラフで表したものである。

点グラフにおいて各項目をみると、1 軸は「母親の体型が崩れにくい」、「場所を選ばない(人目を気にせずに乳を与えられる)」の 2 項目と「飲ませた乳の量がわかる」、「母親以外の人でも乳を与えられる」、「常に同じ質の乳を与えられる」の 3 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、縦軸(1 軸)は、自分(母親)に対するメリットと子どもに対するメリットを判別する軸であることがわかった。

2 軸は「常に同じ質の乳を与えられる」、「母親の体型が崩れにくい」の 2 項目と「飲ませた乳の量がわかる」、「母親以外の人でも乳を与えられる」、「場所を選ばない(人目を気にせずに乳を与えられる)」の 3 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、横軸(2 軸)は、人工乳の健康面でのメリットと人工乳育児の便利さ(手軽さ)を判別する軸であることがわかった。

また、項目間では「飲ませた乳の量がわかる」と「母親以外の人でも乳を与えられる」の 2 項目が最も類似していることがわかった。このことより、母親は人工乳のメリットとして、子どもに対する健康面でのメリットと、人工乳の手軽さを重視して考える傾向があることがわかった。

問 6 「防止行動の認識」

表 5-9 問 6 に数量化 類を適用した結果

| | 固有値 | 寄与率 | 累積寄与率 | 相関係数 |
|-------|--------|--------|--------|--------|
| 第 1 軸 | 0.2834 | 29.88% | 29.88% | 0.5324 |
| 第 2 軸 | 0.2365 | 24.93% | 54.81% | 0.4863 |

選択肢 7「魚の内臓を食べない」と 8「その他」は の数が回答数の 10%に満たないので分析の対象から除外した。

問 6 に数量化 類を適用した結果は表 5-9 の通りである。相関係数は第 1 軸のみ 0.5 以上なので、第 1 軸を採択する。

図 5-23、図 5-24 は 1 軸、2 軸のカテゴリスコアをそれぞれ棒グラフで表したものである。図 5-25 は 2 軸を横軸に、1 軸を縦軸にとり、各選択肢のカテゴリスコアを点グラフで表したものである。

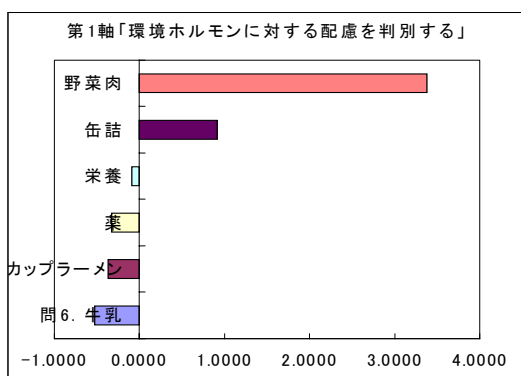


図 5-23 問 6 . 第 1 軸

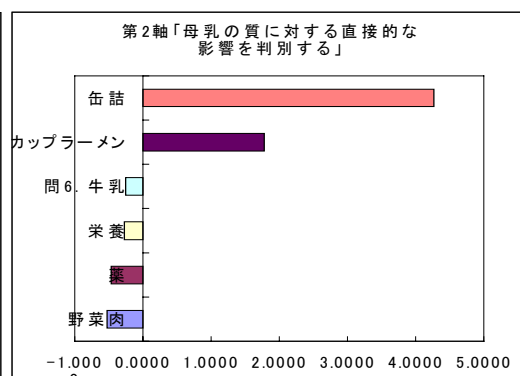


図 5-24 問 6 . 第 2 軸

「環境ホルモンに対する配慮を判別する」「母乳の質に対する直接的な影響を判別する」

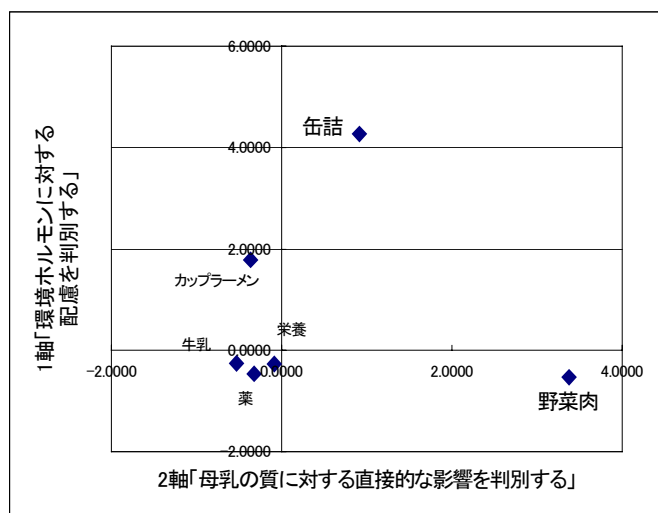


図 5-25 問 6 . カテゴリデータ

点グラフにおいて各項目をみると、1 軸は「缶詰やラップの包装の食品を避ける」、「カップラーメンを食べない」の 2 項目と「牛乳を飲むように心がけた」、「栄養バランスの良い食事をする」、「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」、「質の良い野菜や肉を選ぶ」の 5 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、縦軸 (1 軸) は環境ホルモンに対する配慮を判別

する軸であることがわかった。

2 軸は「質の良い野菜や肉を選ぶ」、「缶詰やラップの包装の食品を避ける」の 2 項目と「栄養バランスの良い食事をとる」、「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」、「カップラーメンを食べない」、「牛乳を飲むように心がけた」の 4 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、横軸（2 軸）は母乳の質に対する直接的な影響を判別する軸であることがわかった。しかし、この第 2 軸は採択されていないので、第 2 軸の解釈は参考程度にしておく。

また、項目間では「栄養バランスの良い食事をとる」と「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」の 2 項目が最も類似していることがわかった。以上のことから、母親は環境ホルモンに関してあまり配慮していないことと、妊娠中、「栄養バランスの良い食事をとる」と「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」の 2 項目を重視して考える傾向があることがわかった。

問 12「環境配慮行動」

表 5-10 問 12 に数量化 Ⅱ 類を適用した結果

| | 固有値 | 寄与率 | 累積寄与率 | 相関係数 |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 第1軸 | 0.2723 | 20.41% | 20.41% | 0.5219 |
| 第2軸 | 0.2450 | 18.36% | 38.77% | 0.4950 |

選択肢 9「環境団体に所属して活動する」と 10「その他」は の数が回答数の 10%に満たないので分析の対象から除外した。

問 12 に数量化 Ⅱ 類を適用した結果は表 5-10 の通りである。相関係数は第 1 軸のみ 0.5 以上なので、第 1 軸を採択する。

図 5-26、図 5-27 は 1 軸、2 軸のカテゴリスコアをそれぞれ棒グラフで表したものである。図 5-28 は 2 軸を横軸に、1 軸を縦軸にとり、各選択肢のカテゴリスコアを点グラフで表したものである。

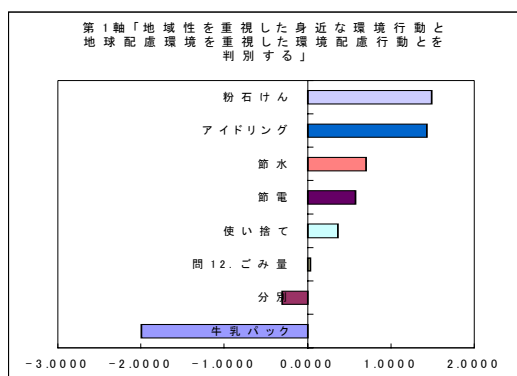


図 5-26 問 12 . 第 1 軸

「地域性を重視した身近な環境行動と地球配慮環境を重視した環境配慮行動とを判別する」

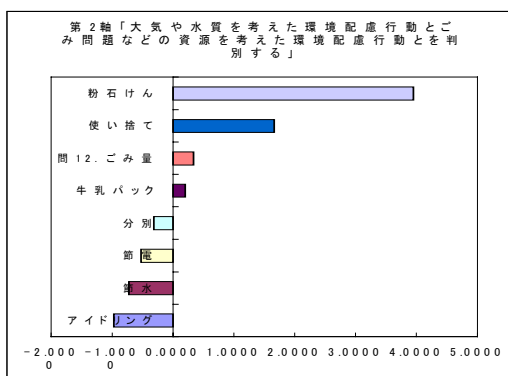


図 5-27 問 12 . 第 2 軸

「大気や水質を考えた環境配慮行動とごみ問題などの資源を考えた環境配慮行動とを判別する」

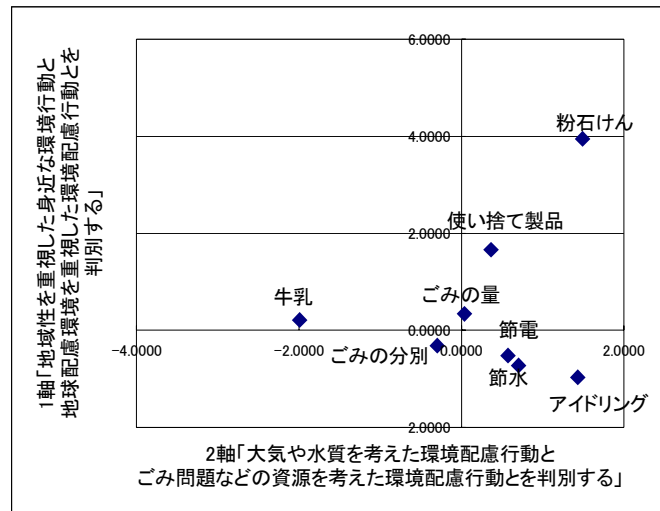


図 5-28 問 12 . カテゴリデータ

点グラフにおいて各項目をみると、1 軸は「粉石けんを使う」、「使い捨て製品を買わないようにする」、「ごみの量を少なくする」、「牛乳パックやアルミ缶、生鮮食品のトレイなどをリサイクルに出す」の 4 項目と「ごみをきちんと分別する」、「節電を心がける」、「節水を心がける」、「アイドリングストップを心がける」の 4 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、縦軸（1 軸）は地域性を重視した身近な環境行動と地球配慮環境を重視した環境配慮行動とを判別する軸であることがわかった。

2 軸は「粉石けんを使う」、「アイドリングストップを心がける」、「節水を心がける」、「節電を心がける」、「使い捨て製品を買わないようにする」、「ごみの量を少なくする」の 6 項目と「ごみをきちんと分別する」、「牛乳パックやアルミ缶、生鮮食品のトレイなどをリサイクルに出す」の 2 項目を分けている。カテゴリ位置関係から、横軸（2 軸）は大気や水質を考えた環境配慮行動とごみ問題などの資源を考えた環境配慮行動とを判別する軸であることがわかった。しかし、この第 2 軸は採択されていないので、第 2 軸の解釈は参考程度にしておく。

また、項目間では「ごみをきちんと分別する」と「牛乳パックやアルミ缶、生鮮食品のトレイなどをリサイクルに出す」の 2 項目が最も類似していることがわかった。このことより、母親はごみ問題を重視して環境配慮行動を行う傾向があることがわかった。

以上の分析結果より、母親が考える母乳のメリットは、子どもに対する利点を重視する傾向があるのに対して、人工乳のメリットとしては、子どもに対する利点に加え、人工乳の手軽さ、つまり母親自身に対する利点をも加味する傾向があることがわかった。母乳育児は、子どもにとっては最適の授乳方法であるが、母親は不便な思いをすることもある。それを解消してくれるのが人工乳の手軽さである。この人工乳の手軽さが、母親が人工乳

育児を選ぶ上での、大きな理由の一つになると考えられる。

また、妊娠中、母親たちが最も注意していたことは「栄養バランスの良い食事を取る」ことと「妊娠中、授乳中は薬を飲まない」ことであり、環境ホルモンへはあまり配慮していないようであった。さらに一般的な環境問題に対して言えば、母親たちの行動は、ごみ問題を重視したものであった。

<項目に共通する因子を探る>

問7「情報の信頼度」と問11「日常生活の情報源」において、各選択肢共通の因子を探るため因子分析を行った。

問7の分析結果

因子は6個求めた。また軸の解釈を容易にするために、軸の回転（バリマックス法）を行った。

表 5-11 問7の固有値表（回転後）

| 因子No. | 二乗和 | 寄与率 | 累積寄与率 |
|---------|----------|--------|--------|
| 因子No. 1 | 1.054145 | 0.1171 | 0.1171 |
| 因子No. 2 | 0.914013 | 0.1016 | 0.2187 |
| 因子No. 3 | 0.796008 | 0.0884 | 0.3071 |
| 因子No. 4 | 0.731334 | 0.0813 | 0.3884 |
| 因子No. 5 | 0.31105 | 0.0346 | 0.4230 |
| 因子No. 6 | 0.095375 | 0.0106 | 0.4335 |

固有値表は表 5-11 の通りである。累積寄与率を見ると、すべての因子を足しあわせても60%未満であり、採択できる因子はない。しかし、因子1は二乗和が1以上となっているので因子1について軸の解釈・ネーミングを行う。しかし、その結果は参考程度であり、分析の結果としては用いない。また、ここでは因子負荷量が0.5以上の項目に注目し、因子の解釈・ネーミングを行う。

因子1の軸の解釈・ネーミング

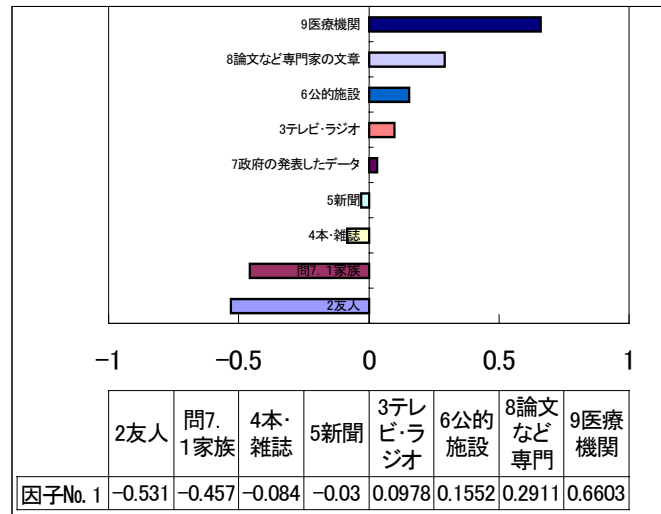


図 5-29 問 7. 因子 1 の因子負荷量

因子負荷量が0.5以上のものは選択肢9「医療機関のみ」である。しかし、その後に8「論文など専門家の文章」、6「公的施設」と続くことより、因子1は「専門家の情報」スケールと名称する。

問 11 の分析結果

因子は5個求めた。また軸の解釈を容易にするために、軸の回転（バリマックス法）を行った。

表 5-12 問 7 の固有値表（回転後）

| 因子No. | 二乗和 | 寄与率 | 累積寄与率 |
|---------|----------|--------|--------|
| 因子No. 1 | 1.18176 | 0.1688 | 0.1688 |
| 因子No. 2 | 0.663869 | 0.0948 | 0.2637 |
| 因子No. 3 | 0.609115 | 0.0870 | 0.3507 |
| 因子No. 4 | 0.352782 | 0.0504 | 0.4011 |
| 因子No. 5 | 0.100294 | 0.0143 | 0.4154 |

固有値表は表 5-12 の通りである。累積寄与率を見ると、すべての因子を足しあわせても60%未満であり、採択できる因子はない。しかし、因子1は二乗和が1以上となっているので因子1について軸の解釈・ネーミングを行う。しかし、その結果は参考程度であり、分析の結果としては用いない。また問7同様、因子負荷量が0.5以上の項目に注目し、因子の解釈・ネーミングを行う。

因子1の軸の解釈・ネーミング

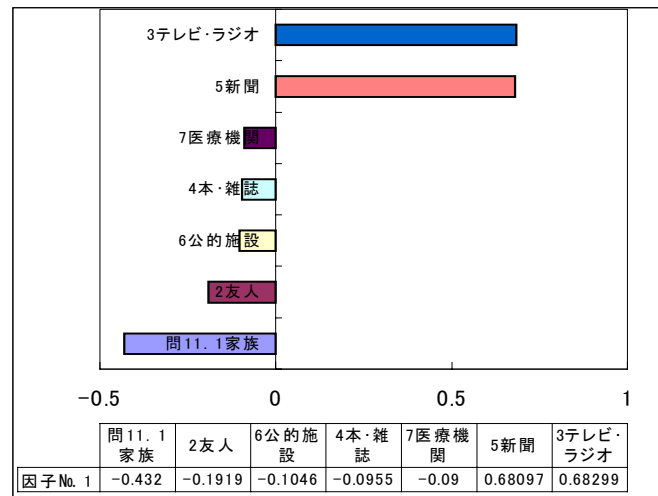


図 5-30 問11.因子1の因子負荷量

因子負荷量が0.5以上のものは選択肢3「テレビ・ラジオ」、5「新聞」である。よって因子1は「マスコミの情報」スケールと名称する。

問7と問11の因子分析の結果、すべての因子の累積寄与率が低く、採択できる因子は存在しなかった。このことから、信頼できる情報源および日常生活における情報源は人によって様々であり、共通のスケールで包括することは不可能であることがわかった。

5.4 調査結果のまとめおよび考察

本アンケートの集計結果およびその分析結果から得られた主要な結論は以下の通りである。

母親の授乳方法は母乳派と人工乳派にほぼ二分されていた。

の結果にも関わらず、「周囲の人々の授乳イメージ」では、周囲の人々は「母乳のみを与えている」と思っている母親が多いようである。

情報に関しては、「医療機関」や「公的施設」からの「情報の信頼度」が高く、マスコミからの情報の信頼度は低かった。一方、「日常生活の情報量」としては「家族」、「友人」、「本・ラジオ」からの情報量が多かった。

母親は母乳汚染に高い関心を持ち、深刻な問題であると捉えている。さらに学歴の高い人ほど、その認知度は高いようである。

母乳を与える母親は、子どもに対する母乳の利点を重視する傾向があり、人工乳を与える母親は、人工乳の子どもに対する利点に加え、母親自身に対する利点も重視する傾向がある。

妊娠中、母親たちが最も重視している行動は「栄養バランスの良い食事をとる」と「妊

娠中、授乳中は薬を飲まない」であり、環境ホルモンを回避することへの配慮はあまりないようである。

一般的な環境問題に対して、母親たちはごみ問題を重視した行動をとっているようである。

しかし、授乳方法を直接的に規定する要因については、弱い相関を持っていた「周囲の人の授乳イメージ」以外に、明確なものを見つげだすことができなかった。

本調査では、授乳方法を直接的に規定する要因については、「周囲の人の授乳イメージ」以外に、明確なものを見つげだすことができなかった。ここでは、なぜアンケートの結果や分析が当初に想定したモデルからかけ離れたものになってしまったのか、これを考察するために、各規定因間の関係と各規定因と授乳方法の選択との関係について再検討してみたい。

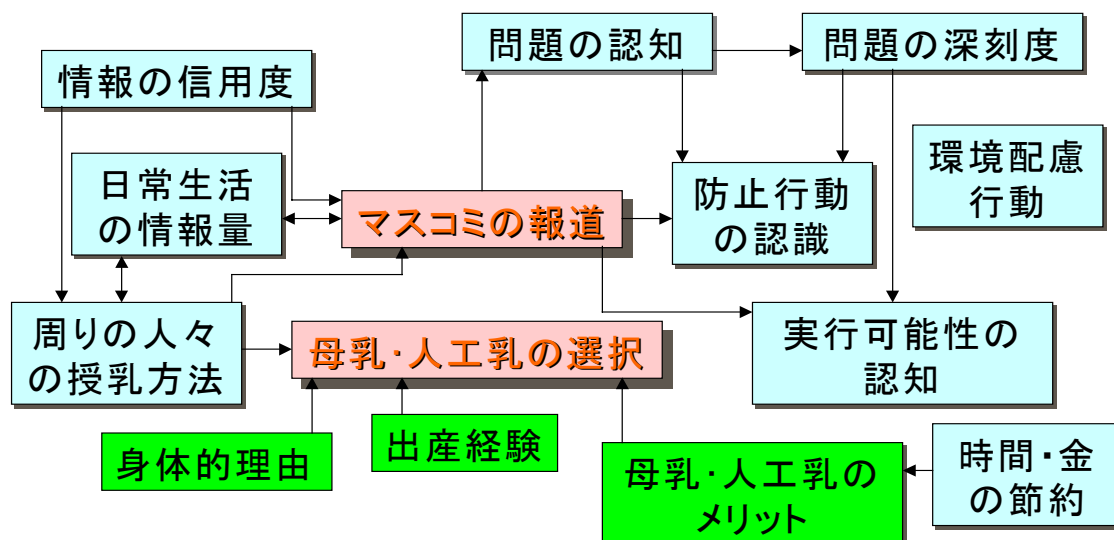


図 6-1 授乳方法規定因のモデル図（改定）

アンケート調査の分析結果からモデルを再検討した結果が図 6-1 である。アンケート調査により、「周りの人々の授乳方法」と「母乳・人工乳の選択」の間には弱い関連があることがわかった。しかし、その他の規定因同士の間に関連は見られなかった。そのため改定したモデル図にある矢印のうち、「周りの人々の授乳方法」と「母乳・人工乳の選択」間の矢印以外は、あくまでも予測の域を越えていない。また、「身体的理由」、「出産経験」、「母乳・人工乳のメリット」の三つの規定因は、当初想定していた規定因以外として重要ではないかと考えた規定因である。本研究では検証することができなかったが、これらの新しい規定因の導入によって、授乳方法に関するより完成度の高い規定因モデルが構築できる可能性がある。これら新規の規定因を含めた改訂版モデルの詳細について以下に説明する。

問題の認知・深刻度

母親の母乳汚染に関する「意識」が高いことがアンケート結果より明らかとなった。しかし同時に、アンケート結果では、授乳方法と認知度や深刻度との間には関連性が認められなかった。つまり、これら「意識」は直接的に「行動」を規定していない、すなわち「意識」から「行動」への移行には、当初からのモデルで想定していたように、他の要因が介在していることは間違いないようである。

日常生活の情報量

医療機関や公的施設は、国の方針に基づき、母乳育児を薦めている。実際に問 3「病院の授乳指導」でも、ほとんどの人が「母乳をすすめられた」と回答している。しかし、母乳汚染に関して言えば、これらの機関で行われる授乳指導では、母親が母乳育児に不安を感じる事の無いように、同問題についての情報がほとんど与えられていないと聞く。

また、問 11「日常生活の情報量」の集計結果から、医療機関と公的施設の情報量があまり多くないことがわかる。よって母乳汚染に関して、これらの機関が母親に与える情報量は、かなり少ないと考えることが妥当であろう。

一方、問 8「母乳汚染問題の認知度」の集計結果では半数以上の人と同問題を知っていると答えている。また問 9「母乳汚染問題の深刻度」の集計結果では、半数以上の人と同問題を、将来深刻になるだろうと考えている。

つまり、彼女たちは医療機関や公的施設以外の情報源から母乳汚染問題の情報を入手していることになる。

周りの人の授乳方法

問 1「自分の授乳方法」と、問 2「周囲の人の授乳方法」に関連があったことから、母親は周りの人の授乳方法に影響を受けていることがわかった。また、問 11 の単純集計の結果でも「家族」と「友人」からの情報量が多いことがわかる。しかし、その「家族」や「友人」も、環境ホルモン問題のような専門的な問題については、マスコミを通さなければその情報を入手し、認知することはできないはずである。したがって、本アンケート調査では明らかにすることができなかつたが、母親たちは母乳汚染などの情報については、やはりテレビや本・雑誌から直接、間接的に入手していると考えることがもっとも説得力を持つことになる。

また、多くの母親が周囲の人は母乳を与えていると考えていた。これは、「母乳育児の方が良い」という意識が母親にあるからではないだろうか。しかし、実際には約半数の母親が人工乳を選択している。つまりここでも「意識」と「行動」は直結していない。

情報の信用度

アンケートの調査結果より、マスコミの情報の信用度は低いことが明らかになった。そのため、マスコミが与える母乳汚染問題に関する情報についても母親の信用は低いと考えられる。そのため、母親は行動を決定する際に必要とする情報が満足に得られず、母乳汚染問題に対する関心は高いものの、実際に行動に移すことができないのではないだろうか。

このことは、次の 実行可能性・防止行動の認知でも同じことがいえる。

実行可能性・防止行動の認知

母乳汚染を防ぐための知識は、専門家が持っている。つまり、一般市民がこれらの情報を得るには、マスコミを通じて情報を入手するほかない。そのため、「実行可能性の認知」「防止行動の認知」には「マスコミの報道」が強く関わっていると考えられる。しかし、アンケート結果では、マスコミの情報信頼度は低く、また出産・育児のために気をつけていた行動についての質問では、環境ホルモンの汚染防止行動の選択数は少なかった。そのため、母親は母乳汚染を防ぐための情報を信用しておらず、「実行可能性の認知」「防止行動の認知」が低くなっているのではないだろうか。

母乳・人工乳のメリット

問4「母乳のメリット」、問5「人工乳のメリット」の分析結果により、母乳のメリットは、子どもに対する利点を重視する傾向があり、人工乳のメリットは、子どもに対する利点に加え、人工乳の手軽さ、つまり母親自身に対する利点とを重視する傾向があることがわかった。

母親はこの母乳・人工乳それぞれが持つメリットとデメリットを比較し、自分または子どもにとって、より有益と感じる授乳方法を選択しているのではないかと考えられる。しかし、本アンケート調査では、母乳・人工乳のメリットによって母親が授乳方法を選択しているのかどうかまで、明らかにできるように質問内容が設定できていなかった。母乳や人工乳のすべてメリットやデメリットのなかから、何を最も重視するかを尋ねるような質問形式が必要であったと考える。

以上のような考察の結果、授乳の選択には、当初のモデルでは想定していなかったような、以下のような規定因が存在している可能性がある。

1) 母乳・人工乳のメリット

上記で述べたように、母親は、母乳・人工乳の各メリットの比較、重要度によって、授乳方法を決定している可能性が非常に高い。しかし、アンケートの尋ね方の不備により規定因として確認することができなかった。この規定因自体はモデルとして当初から想定していたにも関わらずである。

2) 初産か初産でないか

初産かどうかによって授乳方法や環境ホルモンに対する考えが異なっているかもしれない。一人目の子どもを母乳または人工乳で育てた経験から、二人目の授乳方法を決定しているということも考えられる。しかし本調査では、初産かどうかを尋ねる質問項目が含まれていなかった。

3) 母乳育児が不可能な場合

身体的な理由から、母乳育児が不可能な女性も存在する。そのような女性は、最初から授乳方法の選択の余地はなく、予想した当初のモデル図にあてはまらない。本調査ではこれ

らの人々について、区別することなく調査を行った。個人属性の質問で、母乳育児が可能かどうか尋ねるべきであった。

いずれにせよアンケート調査から、マスコミの情報を母親たちが信用していないことがわかった。しかし、母乳汚染問題の認知度、深刻度は高いことから、母親は母乳汚染問題に関する情報を結局は、マスコミから入手しているものと考えざるを得ない。だが、マスコミから入手した情報が信用できないために、母親の授乳方法の選択は、マスコミからの情報には影響を受けていないのである。

同様のことが環境ホルモンの問題全般に言えることだと仮定して、以下、情報の送り手、受け手、社会全体のあり方について考察してみる。

1) 情報の送り手

情報の送り手、つまりマスコミは、受け手の信頼を高めるためにより正確な情報の伝達に努めるべきである。あいまいな情報に基づいた事件をセンセーショナルに取り上げると、市民の不安は増大してしまう。不正確な情報ならば、そのように述べた上で、情報を提示することが必要なのではないだろうか。受け手の冷静な判断を可能とさせる適切な情報を、厳密に選んで伝えることが必要である。

また、情報の与え手は受け手の行動を誘導するべきではない。市民は与えられた情報をもとに、自分自身で行動を決定するべきだ。情報はその行動を起すきっかけ、または行動の手助けになればよい。

2) 情報の受け手

情報の受け手は、より積極的に情報を入手するよう努めるべきである。より多様な情報にもとづいて、自分の考えで行動を決定するべきである。

3) 社会全体

情報の送り手と受け手が上記のような状況を保つことができるように、情報に関する第三者評価機関のようなものを設けるべきである。マスコミ以上に信頼のおける組織、例えば環境 NGO などが情報の評価・批判などを行うことによって、情報の受け手はよりよい選択、行動が可能になると予測する。